

「吾れ斯の人の徒と与にするに非ずして誰と与にせん」の思想

——王陽明思想における「公」と「見在」——

4130150001 志村敦弘

中国・明代を代表する思想は、やはり王陽明の思想（陽明学）であろう。これについては、先行研究において「主体性の強調」「個の主張」といったことがその特色として言われてきた。しかし彼の発言をよく読むと、そのような内容を見出すことはできず、むしろ他者を尊重し、それと共にあるという発想が見られる。ではそれは具体的にどのようなものか。

まず検討すべきは、現代人のいわゆる「個」「主体」に相当する、「心・良知」とは何物であるかであろう。王陽明は、自己一身にあってこれを主宰する心・良知は「天」であるという。そもそも「天」とは、中国思想史では普遍的正しさ、真理の根源といった意味合いをもって語られる。陽明もそれを受け継いでおり、つまり心・良知とは普遍的な正しさ、「公」なるものだとしている。この「公」とは、私欲によって独善的に振る舞うことを抑制し、他者と共にあることを目指すものである。陽明において、心・良知は他者と共にあることをその本質とし、そこにおいてこそ心・良知は働くという。それが彼の心・良知、つまり「自己」なのである。それは近現代に生きる我々のいう「自己」とは大いに異なるものである。

では、その「天」である「自己」=心・良知は具体的にいかなる状況において働くのか。心・良知が普遍的正しさを持つということは、一見形而上的・抽象的理念にも思われるが、陽明によれば、その働く場は目・耳・口・心などの感覚器官でとらえることのできる、文字通り眼前に展開される「見在」（今、ここ）という生々しい現実においてであるという。「見在」は複雑であり、千変万化する。そこにおいて正しい対処をするために、陽明は「情」、つまり感情のもつ力に注目する。感情は「見在」に生起する出来事に対する直接的反応に他ならず、つまり「見在」との関係を的確にとらえ、表現するからであろう。そうした心・良知の「情」の働きは、「楽」の思想に行き着く。陽明はしばしば「楽は是れ心の本体」と述べているが、そもそも心・良知とは是非を正しく判断する倫理的準則とされる。つまり心・良知における感情と倫理の結合の象徴が「楽」なのである。そしてこの「楽」の思想から、「見在」の状況変化に応じて何が正しいかを的確に判断する意義を強調する「無善無悪」説が生じる。

王陽明のいわゆる「見在」に人が生きるとき、現実世界での対応がその生のすべてとなる。彼によれば、それは人間の理想的生き方を体現しているとされる「聖人」も同様であった。陽明の描く聖人像は、複雑で千変万化する「見在」に常に適切に臨機応変に対応することに尽きる存在である。そのように「見在」において「工夫（努力・修養）」し対応する点では、常人と同じとされる。つまり、常人と聖人とはきわめて接近した存在である。常人の生きる、生々しい世界を共に生きる存在なのである。したがって、当時の体制教学であった朱子学の聖人像とは異なり、陽明において聖人は常人の完全なる規範ではなかった。宋学以来、聖人と常人は心において平等であるとされてきたが、陽明はさらに工夫の面においても平等だとしたのである。ここに王陽明聖人論の特色がある。また、「見在」は千変万化して止まない。それへの対応こそが聖人の要件である以上、聖人の工夫も窮まり完成することもないのである。それもまた常人と同じであり、以上をもって「聖人は人情に遠からず」とされた。

さてこのように、聖人は「見在」に適切に対応できるだけの存在とされたが、それを換言すれば生き方の単純化であり、多くの知識や技能を必要としない生き方に人を導く。それが王陽明の「易簡」の思想で

ある。人においては「見在」において心・良知を發揮すること、「致良知」こそが要であり、それ以外は重要ではない、という考え方である。心・良知は誰もが平等に、生来有しているものである。そのみが重要ということは、人間の平等と、生来のものを重視する発想に繋がることになった。後天的に得られる知識や技能、地位などは人において最重要の事ではないとされる。そしてその「易簡」の思想においては、心・良知に根差してさえいれば、その働きの結果生じるものは、何であれ容認された。その最も典型的な例は、仁義・性命を求めさえすれば、老荘や仏教、墨家や楊朱の思想など、従来儒教で「異端」とされた思想・宗教でも評価する、という発言である。陽明の「易簡」の思想は、結果として儒教の枠組みを揺さぶるものとなった。

その陽明の晩年に唱えられた「万物一体の仁」思想は、「仁愛」の思想であるにもかかわらず、人の痛苦・悲惨などへの言及が多い。それはこの「万物一体の仁」思想が、陽明の戦場経験に発しているからである。彼は四六歳から二年ほど軍司令官として地方の反乱を討伐したが、その戦場で数々の悲惨な光景を目の当たりにした。そこから戦禍に苦しむ人々、力ある者に迫害されてやむなく盗賊になった者たちへの強い同情・共感を示すに至った。それが、人は皆この心と同じくしているという思想を生み、それは更に発展して「万物一体の仁」思想となった。それはこの「見在」の人々と共に生きるという思想であり、『論語』微子篇の「吾れ斯の人の徒と与にするに非ずして、誰と与にせん（私はこの人という仲間と一緒にするのでなくて、誰と一緒にするというのか）」という孔子の言葉に基づいてこの理想を語った。それは独善主義を克服して他者と共にあらんとする「公」の思想と、今ここの現実に生きる「見在」の発想、すなわち王陽明思想の核心を一言で表現したものであるといえる。

しかし、この「万物一体の仁」或いは「吾れ斯の人の徒と与にするに非ずして、誰と与にせん」の思想は、完成態としてあるものではない。陽明は心・良知は窮まることなく発展を遂げるものだとした。心・良知とは万物一体の仁を目指して働き続けることそのものと言えよう。例えば、今日良知が發揮されて、一定の境地に達しても、間断なく努力すれば、明日はより深く發揮することができる。そのような窮まり無い心・良知の發揮の果てに、「万物一体の仁」や「吾れ斯の人の徒と与にするに非ずして、誰と与にせん」という理想が実現するのである。そこに王陽明思想の究極的意義をうかがうことができる。

参考までに、博士論文の章立ては以下のとおりである。

## 序 章 問題提起

第一章 王陽明における「天」——「廓然大公」なる「吾」——

第二章 王陽明の「楽」——「無善無悪」なる「見在」——

第三章 聖人の行いは初めより人情に遠からず——王陽明の聖人像——

第四章 王陽明の「易簡」の思想——心の「同」と「異」——

第五章 王陽明「万物一体の仁」思想の原点——その戦場経験と心の「同」——

終 章 「無窮盡」に「擴充」する心・良知

——「吾れ斯の人の徒と与にするに非ずして誰と与にかせん」の理想に向かって——

(了)